

小児看護師による乳幼児の支援の現状に関する文献検討 — 外来受診時の支援に焦点をあてて —

澤 寛子, 岡 いくよ

畿央大学健康科学部看護医療学科 (〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中4-2-2)

Literature review on the current status of support for infants by pediatric nurses — Focusing on support during outpatient visits —

Hiroko SAWA, Ikuyo OKA

Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kio University
(4-2-2 Umami-naka, Koryo-cho, Kitakatsuragi-gun, Nara 635-0832, Japan)

I. 緒言

現在、医学の進歩を背景として、NICU等に長期入院した後、引き続き人工呼吸器や胃ろう等を使用し、たんの吸引や経管栄養などの医療的ケアが必要な児童（以下、医療的ケア児）が増加している。このような状況から医療的ケア児を受け入れる保育所や学校等の体制の整備が急務となり、2021年に医療的ケア児支援法が施行された¹⁾。この法律により、国や地方公共団体は医療的ケア児及びその家族に対する支援に係る施策を実施する責務を負うことになった。在宅で過ごすことの多い医療的ケア児と養育者にとっては、疾患に関する心配事や不安だけでなく、成長発達に伴う心配事などもあると考えられるが、このような子ども達は、専門外来等で定期的な受診によって支援を受けることができる。一方で、専門外来へのアクセスなど、地域の小児科との連携もより重要性が増すことが予測される。また、乳幼児の子育て期にある養育者の多くは受診や予防接種等で病院を利用している。そのため、外来の存在は親子にとって身近な存在となるであろう。さらに飯村²⁾は、「外来の看護の役割は継続看護だけではない。近年、核家族化、少子化が進行し、育児や家庭看護の知識や経験が乏しく、孤立している親が増えており、外来での看護指導や育児支援が重要になってきている。」と述べている。これらのことから外来での小児看護師に求める支援や役割期待も大きいと思われる。三浦ら³⁾が母親203名に行った調査では、地域の子育て支援拠点を利用している8割近くの人が子育ての悩みがあることを報告している。また、子育ての情報源に、約8割が誰かに聞く、ネットによる情報を収集するといった結果が示されている。更にコロナ禍の影響もあり、人との関係性が希薄しているのが現

実であろう。現代は、情報が溢れ育児に対する考え方も多様化してきている。インターネットの普及や技術の進歩により、何が正しいのか判断しにくく、却って子育てに対する不安や悩みを増大させているかもしれない。申ら⁴⁾が生後2～3か月児がいる母親の育児困難感とその関連要因を明らかにすることを目的に行った調査結果では、関連する一つの要因として「育児について気軽に相談できる人がいない」ことを挙げている。

筆者の小児病棟での看護師の経験の中でも、養育者である母親が疾患に関する不安や困りごとの訴えだけでなく、子育てに関する不安の訴えも多いと実感していた。

一方で、少子化対策や子育て支援として専門機関をはじめ、さまざまな施策がとられている。その一環として、2017年4月から市町村に子育て世代包括支援センターの設置が開始されている⁵⁾。子育て支援の整備は行われ始めているが、管野ら⁶⁾は、「子育てを支援として、多様化する子育て家庭における様々なニーズへの対応が必要であると言われてしていると分かった。」と述べている。このことから、子育て支援に関する支援や施策は具体的に進んでいるが、未だ課題は存在すると考えられる。特に、小児看護師ができる子育て支援を考えた際に、乳幼児期における支援が重要なのではないかと考えられる。何故ならば出産後、母子ともに回復が順調であれば1週間以内で退院し、自宅での生活が開始される。特に乳児期では成長発達が著しい。前述したような社会背景から考えると、授乳などで子育てに多くの時間を費やす養育者にとってこの時期における不安や悩みは増大する一方となるのではないかと予測される。

乳幼児健診や予防接種、感染症などで乳幼児と関わ

る機会が多い外来において、小児看護師による乳幼児の支援に関する文献検討により現状を明らかにすることを通して、外来受診時の小児看護師の役割に関する今後の展望を検討することができるのではないかと考える。

II. 研究目的

本研究は、小児看護師による乳幼児の支援に関する文献検討により現状（研究動向、養育者のニーズ、看護師の子育て支援の認識や現状）について明らかにすることを通して、外来受診時の小児看護師の役割に関する今後の展望を検討することを目的とする。

III. 研究方法

1. 分析対象論文

1) 文献検索方法

医学中央雑誌Web版で検索式を「小児看護」「乳幼児」「子育て支援」「外来」のキーワードによる検索を2012年～2022年を対象として行い、本研究の目的に沿った小児看護師の乳幼児における子育て支援と関連する会議録を除く文献10件を分析対象とした。（検索日2023年3月10日）

分析対象論文の詳細については、子育て支援に関する文献が7件（重複文献1件）、養育者の看護職者へのニーズに関する文献が2件（重複文献1件）、小児看護師の現状や役割に関する文献が1件であった。

2. 分析方法

抽出した研究論文を精読し、研究動向（年代、研究対象、研究方法、地域における小児看護師の乳幼児の研究動向）、養育者のニーズ、看護師の子育て支援の認識や現状に着目し、その動向と課題について明らかにした。

3. 用語の定義

「子育て支援」の用語が同じ文献内で「育児支援」と記載されている文献があり、用語の使い分けはみられなかったため、本稿では同義語として用いることとする。

また、本稿では、「小児看護師による乳幼児の支援」とは、小児科外来受診時における小児看護師の子育て支援と定義する。

IV. 結果

1. 検索結果から見た小児看護師による外来の乳幼児支援

医学中央雑誌Web版で2012年から2022年に限り、「小児看護」「外来」「乳幼児」のキーワードによる検索を行い、28件（会議録を除く）であった。主な研究動向は、先天性疾患に関する研究、乳幼児健診に関する研究、実習に関する研究、虐待に関する研究であった。育児支援に関する研究は1件のみであり、分析対象論文とした。「小児看護」「外来」のキーワードで検索したが、食物アレルギーの子どもへの関わり、疼痛を伴う検査や処置に対しての看護、医師が求める外来の小児看護師の役割などの研究内容がみられ、育児支援に関する研究内容は1件（前述文献と重複）であった。また、「小児看護」「子育て支援」「乳幼児」で検索した12件の内、乳幼児健診に関する研究が5件であったが、乳幼児健診の項目に関する研究内容であり、本研究目的に沿った内容ではなかったため、除外した。そこで、「小児看護」「子育て支援」のキーワードによる検索を行い、会議録を除く52件から、発達障害に関するものは発達障害における子育て支援の症例研究であり、本研究目的には沿わないため、除外した。また、保育所看護師に関するもの、実習に関するものを除いた。医療的ケア児に関する研究については、在宅移行への支援や在宅での看護に関するものであり、外来における研究は、管見の限り見当たらなかった。それらを除く9件と前述1件の計10件を分析対象論文とした。分析対象論文は、表1の通りである。

2012年2022年の対象論文を年代別にみると、2012年から2014年は1件、2015年以降は9件であった。研究対象は子育て期の母親（5件）、看護職（3件）、大学教員（1件）、文献研究（1件）であった。研究方法は、無記名自記式質問紙調査（5件の内1件は活動報告と重複）、半構造化面接（1件）、調査研究及び介入研究（1件）、活動報告（3件）、文献研究（1件）であった。

地域における小児看護師の乳幼児の子育て支援の研究の動向として、以下の4つの研究に分類された。

- ・母親が看護職者に求める子育て支援 3件（重複文献1件）
- ・看護職者が提供している子育て支援の内容 2件
- ・母親の育児困難 2件（重複文献1件）
- ・大学教員と小児看護師の協働学習会の効果や子育て支援事業の取り組み 2件

表1 子育て支援に関する文献内容

タイトル	著者	発行年	目的	内容
小児外来に勤務する看護職が認識する育児支援	齋藤泉	2013	小児外来の看護職を対象として、育児支援をしているという認識と育児支援の具体的な実施状況との関連を明らかにする	【研究対象】A市内とその近郊市町村に所在する承認の得られた小児科外来を有する病院や小児科診療所の看護職350人 【研究方法】無記名自記式質問紙調査 【結果】小児外来の看護職の7割が育児支援を行っていると認識していた。育児支援をしていた内容として、「子どもの成長・発達のためのアセスメント」、「母親を支援するためのアセスメント」、「母親の自信を促すための支援」などであった。母親を受容するための支援として、普段の関わりの中で声掛けを行うなど、情緒的な支援を行っていた。
積極的な子育て支援を目指した病棟看護師と大学教員の協働学習会の効果－看護師の認識と行動の変化に着目して－	池田友美,鎌田佳奈美,亀田直子,他	2015	看護師と大学教員が協働して学習会を実施し、場を共有したことによって、看護師に生じた認識や行動の変化を明らかにする	【研究対象】A病院の小児病棟で学習会に参加した看護師（学習会への参加は少ない時で11名、多い時で18名であった。） 【研究方法】調査研究及び介入研究 【結果】看護師間の勉強会の討論から支援が必要な家族を早期に見極めるために、母子健康手帳からの情報収集の大切さや必要性について学び、また、他機関につなげる役割もあると分かった。
国内における地域を拠点とした看護職者による子育て支援の現状と子育て支援に対するニーズ－文献検討の結果から－	牛越幸子,吉竹佐江子,西方弥生,他	2016	地域における看護専門職による子育て支援の現状とニーズを把握することにより、小児・母性看護専門職者としての子育て支援に対する示唆を得る	【研究方法】文献研究 【結果】文献検討の結果から、看護師に期待する具体的な支援として、専門的な知識の提供や「幼児の家庭訪問もしてほしい」といった乳幼児の継続ケアが挙げられた。
子育て中の母親が期待する小児科診療所の看護師の役割に関する実態調査	藤尾順子,山内京子,進藤美樹	2016	子育て中の母親が小児科診療所の看護師に期待する内容を明らかにし、看護師の役割を検討する	【研究対象】子育て期の母親 【研究方法】無記名自記式質問紙調査調査 【結果】無記名自記式質問紙調査を行った結果、母親の7割が育児の心配事を持っていた。看護師を育児の相談相手として選ばなかった理由として、「看護師は育児よりも病気の時の相談相手である」、「看護師に育児の相談をしていいかわからない」などの回答であった。これらのことから、母親は小児科診療所の看護師に対して子育ての支援者として認識されていないことがわかった。
北海道大学が提供する地域子育て支援活動	笹尾あゆみ,山本八千代,前田尚美,他	2016	活動報告	【研究対象】大学近隣及び周辺市町村に居住する未就園の子どもとその養育者 【研究方法】無記名自記式質問紙調査、活動報告 【結果】子育て支援カフェに参加した理由として、「子育て親子との交流」「子どもについての知識・技術の習得」であった。また、自由記述では「初めての子育てでわからない事だらけなので他のお母さんにお話を聞くことで参考になり、また、リフレッシュの機会となる」などの感想であった。
大学とエリア支援保育所との連携による育児支援システムの構築	服部淳子,汲田明美,柴邦代,他	2017	事業報告	【研究対象】未就園児の母子 【研究方法】無記名自記式質問紙調査 【結果】子育て学習会に参加した母親のアンケート結果によると、「子どもの発達について、どの時期にどんなことが必要かわかってよかった」、「もっと早く聞きたかった」と報告していた。また、子育て支援センターでの育児相談の内容として、専門的な発達相談や病気の相談もあるが、そのほとんどは、子育てに関する悩みや不安で「頑張っているね。それでいいよ。大丈夫だよ。」の一言で安心するケースも多い。
子育て世代包括支援センターで活動する看護職が提供している妊娠期からの切れ目ない子育て支援	槻木直子,岩國亜紀子,川下菜穂子,他	2019	子育て世代包括支援センターで活動する看護職が提供している妊娠期からの切れ目ない子育て支援の具体的な内容、および活動を通して得られた成果や課題を明らかにし、看護職への支援について考える	【研究対象】Z県内の子育て世代包括支援センターの保健師19名と助産師2名であった。 【研究方法】半構造化面接を用いた質的探索的研究 【結果】妊娠期から切れ目ない子育て支援の活動を通して感じている課題として、「センターとしての活動を評価できておらず悩みながら活動している」「妊娠期から切れ目なく支援するための組織体制の検討が必要である」「妊娠期から切れ目なく支援するための方略を充実させる必要がある」「対象者の特性に応じて看護職の対応力をつける必要がある」の категорияが抽出された。
子育て中の母親が感じる出産施設退院後から出産後1年までの困難と求める支援	神谷摂子	2020	育児中の母親の出産施設退院後から1年までの困りごとと対処および希望支援を明らかにする	【研究対象】中部地方の中核都市の一部とその周辺地域の子育て支援施設および市区町村の幼児健康診査利用者と、1歳以上の未就園児を持つ母親 【研究方法】無記名自記式質問紙調査 【結果】出産施設退院後から1年間に何らかの支援を希望する母親は全期間において約6割で、支援内容として「家族のサポート」が5割以上で最も多かった。一方、専門職による支援は、産後1ヵ月以降は減少しており、行政などの支援はあまり活用されず、母親からの希望も多くないことが明らかとなった。
大学を拠点とする多職種による子育て支援事業開設に向けての取り組み	菅野由美子,内正子,丸山有希,他	2021	取り組み報告	【研究対象】異なる専門性の大学教員 【研究方法】活動報告 【結果】お互いの専門性を活かし、協働した子育て支援事業に取り組むことができた。子育てを支援として、多様化する子育て家庭における様々なニーズへの対応が必要であることが分かった。
地域の子育て支援の役割と課題－子育て世代包括支援センターに焦点を当てて－	坂本保子,藤邊祐子	2022	地域子育て支援の役割や課題について概観した結果の現状報告	【研究対象】子育て支援を利用する母親 【研究方法】活動報告 【結果】地域子育て支援の役割や課題について概観した結果、より細やかな支援のための課題として、「産後ケアで宿泊を希望している産婦のニーズが高い」「妊産婦の育児に対する不安が大きく育児技術などの習得についてのニーズがある」が挙げられた。

2. 養育者のニーズ

藤尾ら⁷⁾の子育て中の母親が期待する小児科診療所の看護師の役割に関する実態調査によると、看護師を育児の相談相手として選ばなかった理由として、「看護師は育児よりも病気の時の相談相手である」、「看護師に育児の相談をしていいかわからない」、「いつも忙しそうで相談しにくい」などの回答であった。これらのことから、母親は小児科診療所の看護師に対して子育ての支援者として認識されていないことがわかったと述べている。また、服部ら⁸⁾の未就園児の母子を対象とした子育て支援事業に参加した母親のアンケート結果によると、「子どもの発達について、どの時期にどんなことが必要かわかってよかった」、「もっと早く聞きたかった」と報告している。また、子育て支援センターでの育児相談の内容として、専門的な発達相談や病気の相談もあるが、そのほとんどは、子育てに関する悩みや不安で「頑張っているね。それでいいよ。大丈夫だよ。」の一言で安心するケースも多いと述べられている。

牛越ら⁹⁾が行った地域を拠点とした看護職者による子育て支援に対するニーズの文献検討の結果から、看護師に期待する具体的な支援として、専門的な知識の提供や、「幼児の家庭訪問もしてほしい」といった乳幼児の継続ケアが挙げられていた。これらのことから、看護職に対して、優しく接してほしいや、専門的な知識の提供、乳幼児の継続ケアをしてほしいというニーズが示唆されたと述べている。

また、笹尾ら¹⁰⁾の未就園の子どもとその養育者無記名自記式質問紙調査及び活動報告では、子育て支援カフェに参加した理由として、「子育て親子との交流」「子どもについての知識・技術の習得」であった。また、自由記述では「初めての子育てでわからない事だらけなので他のお母さんにお話を聞くことで参考になり、また、リフレッシュの機会となる」などの感想であった。これらの結果から、大学が提供する子育て支援カフェの活動実績から乳幼児を抱える養育者に子育て支援サービスの需要が高いことが示唆されたと報告している。また、神谷¹¹⁾は、中部地方の中核都市の一部にとその周辺地域における育児中の母親の出産施設退院後から出産後1年間の困りごととその対処、またその時期に求める支援を明らかにした研究結果では、出産施設退院後から1年間に何らかの支援を希望する母親は全期間において約6割で、支援内容として「家族のサポート」が5割以上で最も多かった。専門職による支援は、産後1ヵ月以降は減少しており、行政などの産後の支援はあまり活用されず、母親からの希望も多くないことが明らかとなった。産後の支援を整えて

も、情報提供が不十分であれば活用には至らないと指摘していた。

3. 看護師の子育て支援の認識や現状

齋藤¹²⁾は、A市の小児外来に勤務する看護職が認識する育児支援の研究結果によると、小児外来の看護職の7割が育児支援を行っているとは認識していた。看護職が育児支援と認識していた内容として、「子どもの成長・発達のアセスメント」「母親を支援するためのアセスメント」「母親を受容するためのアセスメント」「母親の自信を促すための支援」「親子の関係性発達のための支援」「具体的な育児方法の情報提供と教育」「子どもの体調に合わせた育児方法の情報提供と教育」「他機関との連携、母親に対するサポートの場や情報の提供」であった。母親を受容するための支援として、ほとんどの看護職が普段の関わりのなかで、母親に挨拶し、声をかけ、母の反応を見ながら接するなど、母親を受容するための支援を必ず行っていることが明らかになったと述べている。

池田ら¹³⁾の小児病棟の看護師と大学教員が協働で学習会を開催し、看護師の認識と行動の変化に着目した研究では、「看護師間の勉強会の討論から支援が必要な家族を早期に見極めるために、母子健康手帳からの情報収集が大切になると学び、今まで医師に確認を任せていたがその必要性について新たな知見が得られた、他機関につなげる役割も看護師にあることも分かった」と報告している。牛越ら⁹⁾が行った地域を拠点とした看護職者による子育て支援の現状による文献検討の結果から、小児看護学の専門職としての強みは、子どもの健やかな成長・発達を促進するための視点を有した豊富な知識や経験をもとにして支援方法が提供できることだと考えていると述べている。また、子育て支援の内容と方法については、『母親らが集える場を提供することである。この目的は、育児中の母親らが気軽に立ち寄ることができる「場所」を提供することであり、子育て中の母親らが外出するきっかけ作りを意識した活動である』と述べている。看護学生を支援者としてとらえた坂本・藤邊¹⁴⁾は、地域子育て支援の役割や課題について概観した結果、より細やかな支援のための課題として、「産後ケアで宿泊を希望している産婦のニーズが高い」「妊産婦の育児に対する不安が大きく育児技術などの習得についてのニーズがある」が挙げられた。そのため、今後の取り組みとして、「大学の看護学生が子育て支援の場を実習の拠点として活用し、地域の乳幼児を持つ親には、子どものふれあいの場、子育てに関する相談・活動の場とし積極的に活用することで子育ての負担感や社会的孤立を

予防することが可能になると考えられる」と述べている。また、菅野ら⁶⁾は、異なる専門性を持った大学教員が協働し、乳幼児の養育者のコミュニティ形成を促す子育て支援事業の開設準備の取り組み報告では、お互いの専門性を活かし、協働した子育て支援事業に取り組むことができたと報告している。また、槻木ら¹⁵⁾が行った子育て世代包括支援センターの看護職者に妊娠期からの切れ目ない子育て支援の活動を通して感じている課題として、「センターとしての活動を評価できておらず悩みながら活動している」「妊娠期から切れ目なく支援するための組織体制の検討が必要である」「妊娠期から切れ目なく支援するための方略を充実させる必要がある」「対象者の特性に応じて看護職の対応力をつける必要がある」の категорияが抽出されたと報告している。

V. 考察

1. 研究の動向

2015年以降に先行研究が9件あった。2012年（平成24年）にできた法律「子ども・子育て支援法」とそれに関連する法律に基づいて、幼児期の学校教育や保育、地域の子育て支援の量の拡充や質の向上を進めていく「子ども・子育て支援新制度」が、2015年（平成27年）から開始された¹⁶⁾。このことにより、先行研究の動向が子育て支援に重点が置かれるようになった経緯からではないかと考える。このような背景からも、研究が始まったばかりであり、現状が明らかになっていないことがうかがえる。また、外来での小児看護師の先行研究では、検査や処置に対する研究が多く、小児看護師の役割に子育て支援に関する研究がみられていなかった。このことは、外来における小児看護師は、外来受診の乳幼児の治療やケアが優先され、時間的制約もあり育児支援まで行う余裕がないことや、外来の医療機関の方針があり、看護職自身で行動しにくい場合もあるのではないかと考えた。しかし、先行研究^{7) 8) 9)}からは養育者からのニーズが明らかであり、これから検討していく必要があると考えられる。

日本医師会周産期・乳幼児保健検討委員会答申（平成25年）¹⁷⁾では、成育過程にある者への保健・医療・福祉に係る支援は縦割りで連続性がないことを指摘している。また、槻木ら¹⁵⁾の結果から、切れ目ない子育て支援として看護職も多くの課題を感じていることが分かり、支援への整備が早急の課題であることがうかがえる。さらに久保村¹⁸⁾は、医療的ケア児の就園、就学に向けた多職種との関わりを通して、多職種から外来看護師に求める役割として、外来看護師が地域や

家族との連携をする事で関係者、家族をつなぐ役割が求められるということが明確になったと述べている。これらのことから、医療機関、子育て支援のための福祉施設、民間事業所等が連携して、包括的に子育て支援に取り組むことが必要であると考えられる。そのため、外来受診時の小児看護師の子育て支援に関する役割は大きいのではないかと考える。

また、結果より、外来での医療的ケア児への支援の内容は管見の限り見当たらなかった。このことは、外来における小児看護師の医療的ケア児への支援の関心も低いと考える。しかし、医療的ケア児は定期的な外来受診の中で、疾患に関する継続した支援も必要であるが、子育てに関する支援も求められる役割ではないかと考える。小児看護師は外来看護の役割の中に子育て支援の必要性という認識が低いのかかもしれない。しかし、社会背景や先行研究からも、養育者である母親が子育てに対する不安や孤独感を感じていることが明らかであり、乳幼児に関わる機会の多い外来での小児看護師における役割はやはり大きいと考える。先行研究によると、養育者である母親から看護職者に対する子育てに関する支援のニーズも大きいことが分かった。これらのことから、母親のニーズに見合った支援の検討が早急に必要であると考えられる。

2. 小児看護師による乳幼児の子育て支援

養育者は子育て支援が小児看護の役割と認識していなかったが、看護職者へのニーズは明らかとなった。このことは、これまでは疾患や治療に関する看護が中心であり、生活への支援といったところまでは行き届いていないのが現状であったからではないかと考える。また、以前のような社会背景であれば、子育てにおける悩みや不安があったとしてもご近所を含めた地域の方々が支援できていたため、医療機関での小児看護師の役割として、疾患や治療に対する援助を軸とするだけでよかったのかもしれない。しかし、現在においては、家族形態やライフスタイルの多様化に伴い、求められる小児看護の視野を広げる必要があるのではないかと考える。

また、乳幼児期は感染症などの疾患にもかかりやすい時期にある。外来看護において、あくまでも病状や疾患への看護が最優先となるが、そこに生活のヒントとなるようなアドバイスや声掛けを行うことで安心につながるのではないかと考える。また、医療的ケア児の増加もあり、これまで以上に子育て期にある養育者からのニーズは増大すると考えられる。

また、先行研究¹³⁾より、大学機関が小児看護師と協働することで看護師の認識の変化も見られていた。

看護学生が子育て支援の場を実習の拠点として活用することで、養育者にとっては、子育てに関する相談の場などに活用できていたことから、養育者の子育てに関する不安の軽減につながり、有益であると考えられる。しかし、坂本・渡邉¹⁴⁾の研究結果からは、看護学生の子育て支援に対する思いなどに関する研究結果は管見の限り、得られなかった。多様化する子育て家庭における様々なニーズへの対応が必要なことから、看護職を目指す学生の子育て支援に対する認識や思いに注目することは、今後の看護職の子育て支援に対しても有益な一助となると考え、検討していく必要があると考えた。小児看護師、大学機関、地域の子育て支援の場をつなぐことは、有益であると考え、継続的な取り組みが必要であろう。そのことは、ひいては、子どもの利益につながると考えられる。

また、齋藤¹²⁾は、「育児方針や育児への思いを受け止める」、「がんばりを認める」、「ねぎらう・ほめる」などの援助は母親への情緒的なサポートとして重要な援助であり、乳幼児期は母子ともに努力と成長を認め母親に自信を持たせることが大切であると述べており、母親も「頑張っているね。それでいいよ」などの声掛けが安心につながることが明らかになっていることから、看護職者がねぎらいの声掛けを行うことは必要であると考えられる。

また、2015年に児童福祉法が改正され、第56条の6第2項に「地方公共団体は、人工呼吸器を装着している障害児その他の日常生活を営むために医療を要する状態にある障害児が、その心身の状況に応じた適切な保健、医療、福祉その他各関連分野の支援を受けられるよう、保健、医療、福祉その他の各関連分野の支援を行う機関との連絡調整を行うための体制の整備に関し、必要な措置を講ずるよう努めなければならない」と記載されている¹⁹⁾。これにより、医療的ケア児を取り巻く多職種連携が行われ始めていると考えられる。しかし、医療的ケア児や慢性疾患を抱えた子どもに限らず、保健・医療・福祉・保育・教育などの分野は、子ども達の健やかな成長や親子を支える上で互いに連携することが必要な職種なのではないかと考える。また、前川²⁰⁾は、保健師は地域の親子を支える専門職として他職種と協働する機会も多く、医療・保健・福祉・教育におよぶネットワークの構築やハイリスクアプローチの実践者として期待される職域であると考えたと述べている。

従って、外来の小児看護師だけが親子を支える職種ではない。子どもを社会全体で育てるために小児看護師ができることの一つに他職種との交流による勉強会や意見交換会などを行うことも小児看護師の視野を広

げることにつながると考えられる。そのような場に積極的に参加することも各自に求められることであろう。そのことにより、他職種による親子と向き合う姿勢から看護師の役割へと落とし込めることが結果的に、親子への支援となり、ひいては子どもの利益につながるのではないかと考えられる。

また、他職種と連携していく上で、外来看護師においては、地域の社会資源や子育て支援に関する活動についても理解しておく必要があるだろう。

本研究の限界と課題として、対象文献数が10件であった。文献数の少なさから、小児外来における看護師の役割として育児支援への関心の低さが伺えた。そのため、更なる文献数を重ねて検討していくことが今後の課題である。

VI. 結語

2012年から2022年までの外来の小児看護師による乳幼児の子育て支援に関する文献研究の結果から、外来における医療的ケア児への支援に関する文献が管見の限り見当たらなかった。このことは、外来における小児看護師の医療的ケア児への支援に関する関心の低さがうかがえる。医療的ケア児の増加からも今後、外来看護師に求められる役割は大きい。次に、養育者である母親は外来の小児看護師に対して子育ての支援者として認識されていなかった。一方で看護師に期待する具体的な支援の中には、医療における専門的な知識の提供や乳幼児の継続的な支援を求めている場合もあることがわかった。これらのことから、外来受診時の小児看護師の子育て支援の役割は大きい、看護師自身の認識の低さがあるため、他職種との交流や勉強会等の参加、地域の保健師、保育士をはじめとした他職種との連携により、多様化する子育て支援に向けた小児看護師の視野を広げる必要性があることが示唆された。

子どもが育つ過程にどのように関わるのか、今後の小児看護師の姿勢が問われている。

文献

- 1) 医療的ケア児について<https://www.mhlw.go.jp/content/000981371.pdf>
厚生労働省（2023.3.24閲覧）
- 2) 飯村直子：小児科一般外来における看護師の働き－ある地域密着型中規模病院におけるエスノグラフィ－，日本看護科学会誌，34，46-55，2014.
- 3) 三浦浩美，植村裕子，松本裕子，他：地域子育て

- 支援拠点を利用している母親の子育ての実態と育児ストレスの関連,香川県立保健医療大学雑誌, 13, 57-64, 2022.
- 4) 申沙羅, 山田和子, 森岡郁晴: 生後2～3か月児がいる母親の育児困難感とその関連要因,日本看護研究学会雑誌, 38 (5), 33-40, 2015.
 - 5) 子育て世代包括支援センターの設置運営について(通知) 厚生労働省
https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00tc2680&dataType=1&pageNo=1 (2023.3.20閲覧)
 - 6) 菅野由美子, 内正子, 丸山有希, 他: 大学を拠点とする多職種による子育て支援事業開設に向けての取り組み, 神戸女子大学看護学部紀要, 6, 29-38, 2021.
 - 7) 藤尾順子, 山内京子, 進藤美樹: 子育て中の母親が期待する小児科診療所の看護師の役割に関する実態調査, 看護学統合研究, 17 (2), 33-40, 2016.
 - 8) 服部淳子, 汲田明美, 柴邦代, 他: 大学とエリア支援保育所との連携による育児支援システムの構築, 愛知県立大学看護学部紀要, 23, 113-117, 2017.
 - 9) 牛越幸子, 吉竹佐江子, 西方弥生, 他: 国内における地域を拠点とした看護職者による子育て支援の現状と子育て支援に対するニーズー文献検討の結果からー, 神戸女子大学看護学部紀要, 1, 3-13, 2016.
 - 10) 笹尾あゆみ, 山本八千代, 前田尚美, 他: 北海道大学が提供する地域子育て支援活動, 北海道科学大学研究紀要, 41, 213-216, 2016.
 - 11) 神谷摂子: 子育て中の母親が感じる出産施設退院後から出産後1年までの困難と求める支援, 愛知県立大学看護学部紀要, 26, 123-135, 2020.
 - 12) 齋藤泉: 小児外来に勤務する看護職が認識する育児支援, 北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 9 (1), 101-106, 2013.
 - 13) 池田友美, 鎌田佳奈美, 亀田直子, 他: 積極的な子育て支援を目指した病棟看護師と大学教員の協働学習会の効果ー看護師の認識と行動の変化に着目してー, 摂南大学看護研究, 3 (1), 32-37, 2015.
 - 14) 坂本保子, 藤邊祐子: 地域の子育て支援の役割と課題ー子育て世代包括支援センターに焦点を当ててー, 八戸学院大学紀要, 64, 135-144, 2022.
 - 15) 槻木直子, 岩國亜紀子, 川下菜穂子, 他: 子育て世代包括支援センターで活動する看護職が提供している妊娠期からの切れ目ない子育て支援, 兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要, 26, 41-59, 2019.
 - 16) 子ども・子育て支援法 (◆平成24年08月22日法律第65号) (mhlw.go.jp) 厚生労働省https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=82ab3017&dataType=0&pageNo=1 (2023.3.20閲覧)
 - 17) 妊娠期から切れ目のない支援 (mhlw.go.jp) 厚生労働省
https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu-Shakaihoshoutantou/0000060829_1.pdf (2023.3.16閲覧)
 - 18) 久保村仁美, 渡辺春海, 油浅真紀子, 他: 子供たちの就園、就学に向けて多職種連携と外来看護師の役割, 小児保健研究, 79, 201, 2020.
 - 19) 医療的ケア児の支援に関する保健、医療、福祉、教育等の連携の一層の推進について
https://www.mext.go.jp/content/20200525-mxt_tokubetu02-000007449_10.pdf (2023.5.01閲覧)
 - 20) 前川智恵子: 母子保健・子育て支援領域における専門職の役割ー子育て世代包括支援センターの活動を中心にー, 甲子園短期大学紀要, 36, 47-53, 2018.

